

京都・顕真学苑法話  
*Kyoto-Kenshingakuen Collected Sermons*

第一法話「阿弥陀経におけるお浄土」

the first sermon

The Pure Land in *Sukhāvati-vyūha (The Small Amida-sūtra)*

「ほゝえみにかゝやくいのちなみたにもくもらぬいのちたゝえまつらむ」  
(眞隆)

(註：「いのち」とは、如来のことであり、信心のことであり、  
お念佛のことです。)

ようこそお参り下さいまして、ありがとうございます。  
皆様お変わりございませんでしたでしょうか。  
春の清しい息吹が、目にも顕かな頃となりました。  
本日のお題は「阿弥陀経におけるお浄土」でございますが、  
私共にとりましてお浄土とは、懐かしい方々が美しい御仏となられて  
永久に生きていらっしゃる、まさに心の故郷そのものの様な所でございます。  
阿弥陀仏のお浄土をお説きになるお経は数多くございますけれども、  
主なものとしましては三つございまして、  
それらは浄土三部経といわれております。浄土三部経には、  
大経と呼ばれます仏説無量寿経、  
観経と呼ばれます仏説観無量寿経、そして  
小経と呼ばれます仏説阿弥陀経がございまして。  
本日は、この小経、つまり阿弥陀経、  
これはご法事でいつもあげられているお経でございますが、  
この阿弥陀経の概要を、先ずは一通り簡単にご説明致しまして、  
その美しく輝かしい描写の不可思議について、  
その意味するところをお話させていただきたいと存じます。

お手元に配布いたしました勤行集を御覧下さいまし。

『佛説阿彌陀経』の「如是我聞」から

「無量諸天大衆俱」までの段におきましては、

お釈迦様が、舎衛国の祇樹給孤獨園、即ち祇園精舎にいらっしゃいます。

このお説法の座には、「大比丘衆」、これは大きな比丘のあつまり、

「比丘」とは出家のお弟子さん方のことでございます、

そして「大菩薩」、「諸天大衆」、  
言い換えますと天の世界の方々が集まっていっぱいます。

「爾時佛告長老舍利弗」以下におきましては、  
出家のお弟子さん方の長でいっしやいます舍利弗に、  
実に三十回以上もお名前をお呼びになりながら、  
お釈迦様は阿弥陀仏のお浄土をお説きになるのでございます。  
先ず、お浄土とは何処にあるのかということにつきましては、  
「從是西方過從萬億佛土」、  
是より西の方、十万億の仏土を過ぎて、と書かれてございます。  
「有世界名曰極樂」、お浄土がございまして、  
名づけて極樂といいます、そして  
「其土有佛號阿彌陀」、そのお浄土に御仏がいっしやいまして、  
そのお名前は阿弥陀と書かれてございます。  
阿弥陀とは、はかりしれない寿命を持つもの、無量寿、  
そしてはかりしれない光を持つもの、無量光という、  
二つの意味を持つお言葉でございます。

以後、お浄土の美しくすぐれた有様が、  
光輝くように描写されます。その一部を申しますと、  
「七重欄楯七重羅網七重行樹皆是四寶周而圍繞」、  
七重の玉垣、七重の飾り網、七重の並木、  
皆これ金、銀、瑠璃、玻璃（水晶）の四種類の宝より成りますものが、  
あまねくめぐらされております。

「有七寶池八功德水充滿其中池底純以金沙布地」、  
七宝の池がございまして、八つの功德ある水、  
即ち優れた特性を持つ水がその中に充滿してございまして、  
池の底は、専ら金の砂を以って、地面に敷かれております。

「四邊階道金銀瑠璃玻璃合成上有樓閣亦以金銀瑠璃玻璃磲磔赤珠碼瑙而嚴飾之」、

その四辺の階段は金、銀、瑠璃、玻璃で合成されております。  
上には樓閣がございまして、  
金、銀、瑠璃、玻璃、磲磔（玉石）、赤い珊瑚、碼瑙を以って、  
これは飾られております。

「池中蓮華」から「微妙香潔」までは、  
池の中の蓮華の大きいことは車輪のようで、

青い色には青い光、黄色には黄色の光、赤い色には赤い光、  
白い色には白い光がございまして、  
微妙で香しくきよらかであると書かれてございます。

「彼佛國土常作天樂黄金爲地晝夜六時而雨曼陀羅華」、  
かの御仏の国は常に天の音楽をなし、黄金を大地とし、  
昼夜、六つの時、即ち、日没、初夜、中夜、後夜、晨朝、日中に、  
曼陀羅華の雨を降らします。そして、

「彼國常有種種奇妙雜色之鳥」から「聞是音已皆悉念佛念法念僧」  
におきましては、かの国にはつねに種々の珍しい鳥たちが、  
昼夜、六つの時に、やわらかく雅びな音を出しまして、  
その音は法を説き述べます。この音を聞き終わりました、  
皆悉く、仏を念じ、法を念じ、僧を念じます。

「彼佛國土微風吹動諸寶行樹及寶羅網出微妙音」から「念佛念法念僧之心」  
におきましては、かの御仏の国ではそよ風が  
もろもろの宝の並木と宝の飾り網を吹き動かし、微妙な音を出します。  
たとえば百千種の音楽を同時になすようでございます。  
この音を聞く者は皆、自然に御仏を念じ、法を念じ、僧を念じる心を生じます。  
以上がお浄土の美しくすぐれたご様子、「功德莊嚴」でございます。

しかし、ここで不思議にお思いになる方々が、  
少なからずいらっしゃることと存じます。  
さとりの世界でございますお浄土が、この様に西の方にあつて、  
感覚的にきらびやかにまばゆいご様子で存在していると説かれておりますのは、  
何故なのでしょう。

お浄土はさとりの世界でございますから、方角や感覚を、  
遙かに超越されているはずでございます。なのに、この輝かしい描写は、  
果たしてどの様な意味を秘めて書かれたものなのでしょう。  
この西方浄土に関する尤もな疑問にお答えするに当たりましては、  
先ず、私の幼い頃の古い記憶、思い出をお話いたしますのが、よりわかり易く、  
法話に適しているように思いますので、お話させていただきたく存じます。

西方浄土のことを、とても不思議に思いましたのは、  
私が八才の時のこととございました。  
八才で西方浄土のことを不思議に思いましたのには、  
実はそれ以前に事情がございます。八才よりも昔に遡りまして、  
五才の頃、私は本屋さんで、『太陽・月・惑星』という本など、

数冊の宇宙の本が大変気に入りまして、母にお願いしてその数冊を購入し、その本たちに載っております銀河や星雲や太陽系の惑星たちの写真や絵を、ひねもす眺めては喜んでおりました。

そして六才の時には、祖父に六道輪廻について教わりましたので、頭真学苑の、以前にございました木造の本館の二階の講堂の黒板に白墨で、太陽系の惑星たちが回転している図と、祖父に教わった六道輪廻の図とを、並べて大きく描きました。太陽系の図も、六道輪廻の図も、同じく回転している世界の図として、私の中では何の矛盾もなく存在しているのでございました。

しかし、小学校に入学しまして、西方浄土のことを知りましたとき、幼い頃から親しんでいた宇宙のお話と、西方浄土のお話とが、子供心に、何か上手くかみ合わない様な気がしたのでございます。まず、私は頭の中に図を描いて考えました。西の方にお浄土があるとしたら、地球は丸うございますので、西へ西へとお浄土を目指して旅する内に、地球を一周して、元いた場所に戻ってしまうのではないか、おかしいことだ、と私は考えました。

更に、頭の中に図を描いて考えました。もしお浄土が、地球の表面にあるのではなくて、何処か西の方の宇宙の果てにあるのだとします。しかし、地球は自転と公転をいたしておりますので、「西の方の宇宙の果て」と申しましても、地球が回転するにつれて、刻一刻と西の方角がずれてしまうのでございます。詳しく申し上げますと、例えば正午には、私は地球上の、太陽の光の当たる側におります。その後真夜中になりますと、地球は半回転いたしますから、私は地球上の、太陽の光の当たらない側、つまり正午にいた位置の反対側の位置にいることになります。（地球の公転や地軸の傾きと歳差と章動、太陽系自体の運動等々を考えますと、位置が少しずれますけれども、八才の時点では、図を単純化いたしまして、地球の自転を主に考えていたのでございます。）私が正午にいた位置から見た「西の方の宇宙の果て」の方角と、私が真夜中にいる位置、即ち、正午にいた位置の反対側の位置から見た「西の方の宇宙の果て」の方角とは、

なんと殆ど逆方向となってしまうのでございます。  
真昼と真夜中とでは、「西の方の宇宙の果て」の方向が、  
完全に逆転してしまうではないか、なんということ、  
ますますおかしなことだ、と私は考えました。

子供心に不思議でたまらなくなりましたので、  
私は祖父にこの疑問を尋ねてみようと思いました。  
祖父の答は、次の様なものでございました。  
「お浄土は、西の方だけにあるとは限らない。  
東の方にもあるかもしれない。  
南の方にもあるかもしれない。  
北の方にもあるかもしれない。」

祖父の言葉の意味がわかるようになりましたのは、それから暫く経ちました後、  
庫裡のお茶室で、お茶を嗜んでいる時のことでございます。

『山上宗二記』には、仏法も茶の湯の中にあると書かれておりますので、  
茶道と禅宗との結び付きは周知でございます。しかし、  
茶道はお浄土とも深い関わりがございます、例えば  
室町時代の初期に書かれたといわれております『喫茶往来』にも、  
厭離穢土の聖、欣求浄土の暇（いとま）に、  
つまり世俗を離れてお浄土を欣（ねが）う僧侶が、  
長い夜の眠り（永眠）を除くためにお茶を焙調すること、  
そして、末法万年の時、即ち  
一万年の末法の時代には、お茶はますます時機に適している、  
というようなことが書かれているのでございます。

その日お茶室は、やや仄暗さに沈んでおりましたが、  
藤蔓の掛る下地窓と、突き上げて明かりを取る連子窓から、  
朧ろに見える光の筋が射しておりました。不思議なことに、  
閉ざされているはずのお茶室の中には、全体に微かな光が満ちておりました、  
光はすべての隈に、一様にやさしく拡がっておりました。  
床の間には、うつし世とお浄土との境を表す様に、  
曾祖父のお軸「普照無際土」が掛っておりました。  
このお言葉は、お経の重誓偈にございまして、  
あまねく限りのない国土を照らすというお言葉でございますが、  
そのお言葉の通りに、光はすべての方角を照らしているのでございました。

お茶室を満たしているのは、  
釜の鳴る松風の音のみではなかったのでございます。  
白い一重の木槿（むくげ）を生けた経筒の花入、  
この経筒と申しますのは、金属製或いは陶製の、蓋付きの円筒形の入れ物で、  
その中にお経が納められていたものでございますが、  
茶道ではそれを花入としても用いるのでございます。  
その経筒の内部に至るまで、お浄土の御光は満ち満ちて、  
お浄土のはたらきはこの世のあらゆる隈に及んでいる、  
だから、お浄土はあらゆる方角にあるかもしれないと言われているのだ、  
と私はその時理解したのでございます。  
お浄土のみ光が、世界の至るところに浸透していることの不思議を、  
私は考えました。

これが、私の子供の頃の西方浄土の思い出でございます。  
お浄土はさとりの世界でございまして、  
法性のお浄土は無相寂靜でございまして、  
西方のみと、一つの方角に限定されることはなく、  
方角や感覚の領域を、超越されているのでございます。  
教行信證の行文類の用欽釋文に「住非莊嚴國土」、言い換えますと、  
「住するに國土を莊嚴するに非ず」とございまして、  
御仏のお住まいになる國土つまりお浄土とは、  
凡夫のはからうことのできない無相の莊嚴でございまして。  
無相寂靜の法性のお浄土の莊嚴とは、凡夫の考えるような  
感覺的に煌らかに美しい莊嚴と名付けてはならない莊嚴なのでございます。  
【梅原眞隆『教行信證新釋』卷上（昭和三十年十一月二十日發行）】  
ただ、阿彌陀經には、  
この世の目に見えるものたちに捉われてしまっている私共が、  
お浄土を具体的に理解して、現実的に思い描くことができる様、  
可能な限りわかり易くお説きになるために、  
いわば方便としての指方立相としまして、お浄土は具体的に、  
西方にあつて感覺的に美しいご様子である、と説かれているのでございます。  
阿彌陀經の麗しくきらびやかな西方浄土とは、  
本来は思議することの極めて難しいお浄土を、  
私共が現実的に捉えることができる様にとの、  
御仏の慈悲のお心の真実のあらわれなのでございます。（註を御覧下さいまし。）

では、阿彌陀經の解説に戻ります。

「舍利弗於汝意云何」以降、先程申しました阿彌陀というお名前の二つの意味、光明が無量であることと寿命が無量であることが説かれ、

「阿彌陀佛成佛已來於今十劫」、阿彌陀仏が御仏と成られてこのかた、今におきまして十劫であることが述べられます。

劫につきましては様々な考え方がございまして、次回の法話で詳しくご説明いたしたく存じます。

或る説では一劫とは、梵天の半日の長さ、

即ち四十三億二千万年に相当するともいわれております。

この説によりますれば、十劫とは四百三十二億年とされるのでございます。

以下、「但可以無量無邊阿僧祇劫説」まで、極楽浄土の方々は、皆さとの道から退歩することがなく（これを「皆是阿鞞跋致」と申します）、そのお浄土の方々の数は甚だ多く、

ただ無限の時間を以って説くことができるだけだということが述べられます。

「舍利弗衆生聞者應當發願願生彼國」から「應當發願生彼國土」まで、お釈迦様のこのみ教えを聞く者は、

お浄土に生まれようという願いを起しなさい、と説かれます。そして、善男子や善女人が、阿彌陀仏がお説きになるのをお聞きして、

そのお名前を心に保ち、一日ないし七日に亘って心を一つにするならば、

阿彌陀仏のお浄土に往生することが述べられます。この往生と申しますのは、さとの世界に生まれますことを指しまして、

迷いの世界に輪廻して生まれる場合の生まれ方とは、

全く意味が異なるのでございます。

漸く阿彌陀經は、六方段と呼ばれます後半部に進みます。

「舍利弗如我今者讚歎阿彌陀佛」から

「舍利弗於汝意云何何故名爲」に入ります直前までの箇所におきましては、お釈迦様が阿彌陀仏の功德を称讃なさっていらっしやいます様に、

東、南、西、北、下、上、つまりあらゆる方角の世界に、

ガンジス河の砂の数（「恒河沙數」）程、数限り無く御仏がましまして、このお経を信じる様に勧めていらっしやいます。

御仏方が称讃なさる阿彌陀仏の功德と申しますのは、

阿彌陀仏とそのお浄土の不思議な徳性のことでございます。

「一切諸佛所護念經」から、善男子や善女人が、

阿彌陀仏のお名前をお聞きするならば、

皆、一切の御仏方の共に護られる所となり、皆、無上の真実なる完全なさとり

(これを「阿耨多羅三藐三菩提」と申します)において、  
さとりにへの道から退歩することのないこと  
(これを「不退轉」と申します)、これ故、  
「信受我語及諸佛所説」、  
お釈迦様と御仏方のお説きになるところを信じるべきだということ、そして  
「若有信者應當發願生彼國土」、即ち信じるならば、まさに  
かのお浄土に生まれようと願いを發するべきだということが述べられます。

「舍利弗如我今者稱讚諸佛不可思議功德」から、「説此難信之法是爲甚難」まで、  
お釈迦様が御仏方の功德を稱讚されます様に、御仏方もまた、  
五つの濁りのあるこの世におきまして  
(この五つの濁りとは、時代の濁り、思想の濁り、煩惱の濁り、衆生の濁り、  
寿命の濁りのこととございます)、  
無上の眞実なる完全なさとり  
(先程申し上げました「阿耨多羅三藐三菩提」)を得られて、  
信じ難いみ教えをお説きになるという、甚だ難しく稀なことをなされる  
(これは「能爲甚難希有之事」にあたります)  
お釈迦様を稱讚なさっていらっしゃいます。そして、  
「佛説此經已」から最後までには、  
お釈迦様がこのお経を説き終わられますと、あらゆる方々は、  
「聞佛所説歡喜信受作禮而去」、  
お釈迦様のお説きになられたことをお聞きし、喜び信じて、  
敬礼してその場を去りました、と述べられまして、  
お釈迦様のお説きになられた阿彌陀經、『佛説阿彌陀經』は終わります。

最後に、本日のまとめとしまして、お浄土一般につきまして、  
三つの項目を述べさせていただきます。

先ず第一に、お浄土とは一般に、  
御仏のいらっしゃる浄らかな国土のこととございます。  
無限の時間と空間の中に、御仏は無数にいらっしゃいますので、  
御仏の浄らかな国土、つまりお浄土も、無数にあるといえるのでございます。  
天親菩薩の『浄土論』におきましては、  
お浄土は蓮華藏世界であるとも書かれてございます。

また第二に、これは阿彌陀經の解説にて申し上げましたが、

阿弥陀経の後半の、六方段と呼ばれる箇所は、東、南、西、北、下、上の方角に、無数の御仏がましまして、阿弥陀仏の御名前とお浄土を称讃していらっしゃいます。阿弥陀仏のお浄土は、世界のあらゆる方角の御仏方に支持されておりますので、阿弥陀仏の御名前を聞く衆生たちは、全世界のあらゆる御仏方から守られていることになるのでございます。先程も申し上げました様に、さとりの世界であるお浄土は、西方のみと、一つの方角に限定されることはなく、法性のお浄土は無相寂靜でございますから、方角や感覚の領域を遥かに超越されているのでございます。ただ、この世の目に見えるものたちに捉われてしまっている私共が、具体的に理解し、思い描くことができます様、わかり易くお説きになるために、いわば方便としての指方立相としまして、阿弥陀経にはお浄土につきまして、具体的に、西方にあるきらびやかな存在のように説かれているのでございます。もう一度申し上げますが、阿弥陀経の麗しく煌らかな西方浄土とは、本来は思議することの極めて難しいお浄土を、私共が現実的に把握することができるようにとの、御仏の慈悲深いお心の真実のあらわれなのでございます。  
(註を御覧下さいまし。)

更に第三に、お浄土は、ただ現世の私共を超越されているのみではございません。お浄土のはたらきは、この迷いの世界に現れて、生きとし生けるものに及ぶのでございます。お浄土は、現実からの逃避ではございません。より深い立場から、現実にはたらきかけるものなのでございます。お浄土に往生して御仏となりますと、この世に還り来たりまして、縁のあるすべての方々を、御仏として助けてあげることができるようになります。言い換えますと、お浄土に往生するということは、御仏となって一切を救うために、如来と共に永久に生きてはたらくことなのでございます。  
[梅原眞隆『大藏経講座 17 正信偈・歎異鈔講義』  
(昭和八年五月十五日初版発行) 第十四章 北天の論主]

本日は、阿弥陀経全体の解説を致しまして、お浄土のみ光は方角を超えて、この世のあらゆる限に及んでいるということ、

またお浄土への往生とは、如来と共に永遠に生きて、  
この迷いの世界のすべてにはたらきかけることだということを、  
お話いたしました。この様にお浄土のみ教えは、  
高い宗教的理想を示しているといわれているのでございます。

## 註

梅原眞隆選集『眞宗提要』（昭和二十六年一月一日発行）中の  
「教行信證概説」（大正十四年十月公開講座の速記録）  
梅原眞隆選集『親鸞教學』（昭和二十七年十月廿五日発行）中の  
「聖化の五層態」（大正十四年十一月）  
「浄土觀」（昭和三年十二月）  
「教行信證の中心問題」（昭和四年二月、京都帝國大學の樂友會館において  
開催された眞宗學研究所の公開講座における速記録）  
梅原眞隆選集『眞宗の教旨と實踐』（昭和二十九年七月廿五日発行）中の  
「如來の三樣態」（昭和三年七月公開講座の聞書）によりますと、  
御仏には、色もかたちもなくあらゆる相を空じた純粹の法界である一如と、  
光明無量と寿命無量の御かたちと御名前を現された如来の佛體と、  
信知し称えることの比較的に容易な御名前としての南無阿弥陀仏の名號との  
三樣態がございまして、  
この三者には本質にも分量にも何らの増減もなく、  
同一のものが三つの在り方を取っているのでございます。  
それと同様に、お浄土にも、  
相を空じた無相寂靜の本然態のお浄土と、  
相を現じた廣大無邊際の顯現態のお浄土と、  
相を現じた有邊の念持態の、觀想の比較的に容易な西方浄土との  
三樣態がございまして、  
お浄土の三樣態はその本質において同一で、価値の差異はございません。  
指方立相としての麗しく煌らかな西方浄土とは、  
無相を現す有相、無邊のままの有邊、  
聖なる生命さながらの顯現でございまして、  
無相寂靜のお浄土、廣大無邊際のお浄土と同じく、  
眞実のお浄土を、私共に顕かに示して下さるのでございます。

かざみぐさ  
香散見草（梅）

京都・顕真学苑副幹（顕真）